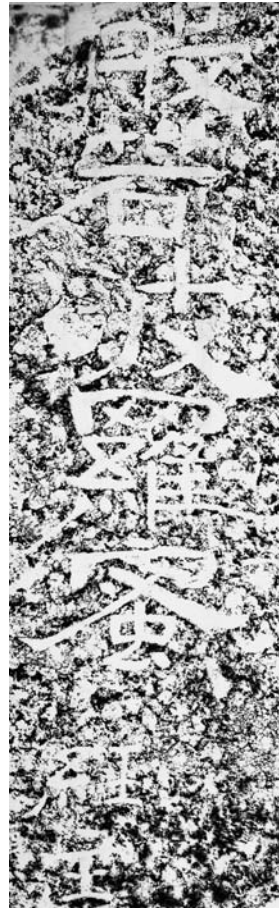


図版②



般若波羅蜜刻石
「ソライサン マガイコクセキ
「徂徠山摩崖刻石」の一

武平元年(570)
(北齊時代)

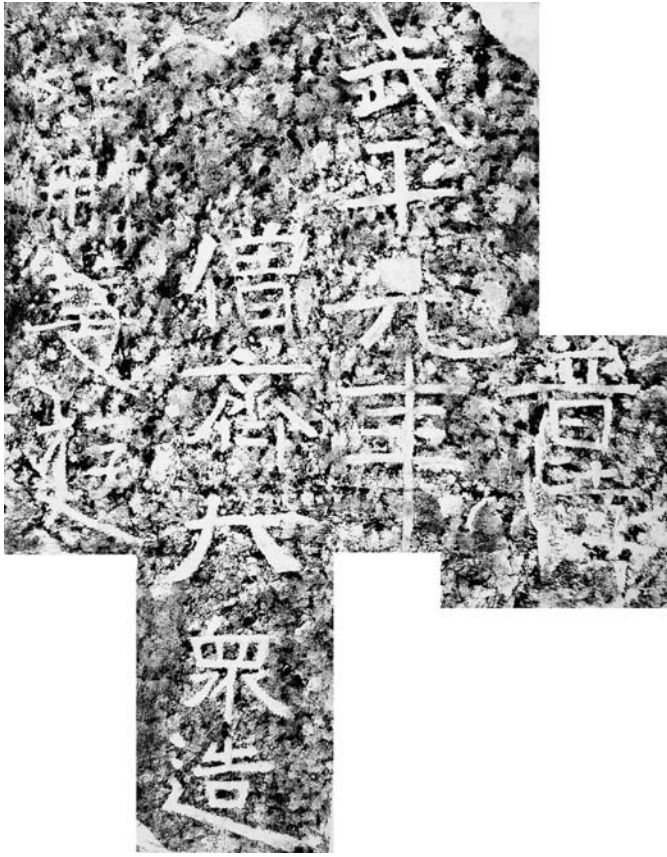
雄大な摩崖刻石⑧

木 雞

木 雞 室

伊 藤 滋

図版③



図版④

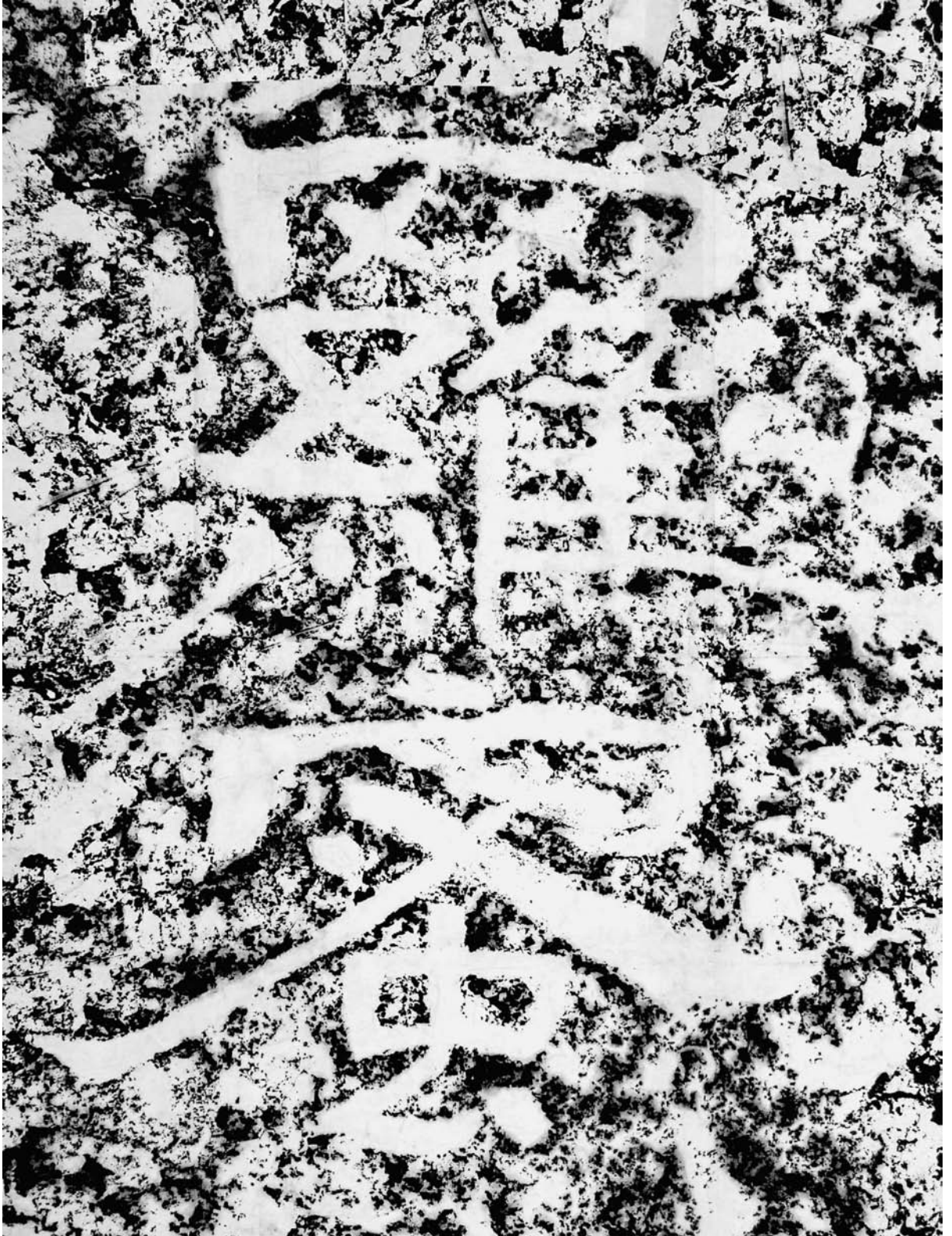


山東省の仏教摩崖刻石は近年各種のものが、新たに紹介されている。今回の「徂徠山摩崖刻石」は、山東省泰安県の徂徠山の暎佛巖に刻されている。この地名に因んで「暎佛巖摩崖刻石」とも称されている。「金石萃編」などにも記録され、割合古くから知られているが、当時あっては、相当不便な地域にあるためであろうか原刻拓本はそれほど多く流布していない。一行四字の「大空王佛」の佛号から、十四行・行七字のやや大きいまで含めて、七種ほどの刻石からなる。書風は、楷書であるが、一部にはやや隸書の筆意を具えたものもあり、また北齊の武平元年(570)の年号があるものもある。図版に示したのは、この摩崖刻石の中で最も大きな文字である「般若波羅蜜經主」の一行から「羅蜜」の二字を選んだ。この「般若波羅蜜經主」の刻石が、「徂徠山摩崖刻石」のなかで最も大きな文字であり、隸書の趣を示し、ゆったりとした筆勢のなかに穏やかな躍動感を見せている。主図版の「蜜」の幅は、39cmである。

次号は、「紀泰山刻石」です。この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

図版① 「縮小」



書道芸術院 平成の群像 (2012)

「志欲静」



第65回書道芸術院展出品



私と刻字

清水翠径

やっと歩みを覚えた幼ない孫を、見
るにつけ、刻字の道に入門したての、
自分の昔に想いを馳せる。

故香川峰雲先生ご指導のもと、重陽
会長野支部として刻字書道の研鑽に、
つとめておられた、恩師宮澤梅径先生
とめぐり合ってから、香川春蘭先生、
命名の崇嶺会（高い嶺の意）発足当初
より30年の年輪を重ねました。今は亡
き千秋会の長揚石先生のご指導、また
社中先輩諸兄のアドバイス、我が人生
にとって貴重な時間を過ごさせていた
できました。

刻字は書道の一分野、木の板やセラ
ミック板などに文字を刻む芸術で、文
字を浮き彫りにする陽刻と、文字を削
る陰刻があり、文字を立体的に、表現
することができる書道です。

まず選文、字源辞典で字意を探る。そ
の後書稿、自書目刻が基本の刻字書道、
筆意を刀意に変えなければならぬ。

如何に線筆を表現するか一枚の板と

対峙し試行錯誤する。完成した書稿を
トレーシングペーパーに写し取って板
にはり鑿を入れる。仕上り後、彩色を
施し金箔を、漆等で貼り仕上げとなる。
このように刻字作品の制作段階は苦勞
の連続であるが、故に完成した自分の
作品には特別な愛着が湧く。

立体芸術としての刻字は、甲骨・金
文に通じる書の原点となるものであろ
うと考えます。書の原点となる刻字を
書の未来にいかにつけていくか、
それが刻字作家の果すべき役割である
と真摯に受けとめています。

こんなにやっているのに認められな
い、認められることを期待してやって
いるから傷つく、期待せず自分が柔軟
になり生活リズムを作れば楽になる。

夢は願えば叶うもの、書を通して様々
な出会いのあった先輩諸兄の温かいご
指導や助言に感謝し、今後出合うであ
らう皆様にご期待を申し上げ、向学の
意を強くしている昨今です。

書のひろば

理事長 辻元大雲

創立65周年記念 書道芸術院中央展 盛況裡に

2月7日より12日まで、東京セントラル美術館と東京銀座画廊美術館8階全フロアーを使用して賑やかに開催された。陳列数は450点余と前回より100点ほど増加したが、全体にゆったりと陳列され明るく見やすい会場で好評であった。

陳列日6日には外部依頼の3名の方々にご来場いただき「評論家の目」として数点選考していただき、翌7日10時より報道関係20数社に対し記者会見を、恩地会長、下谷常務理事と共に行い、65回展の概要、更に記念事業などをご説明申し上げた。

2月11日午後から帝国ホテルにて、作品研究会、表彰式、物故者慰霊祭、そして報道関係、ご後援いただいている毎日新聞社、全日本書道連盟代表の皆様をお招きしての祝賀懇親会は550名余の参加者で大盛況であった。

また2月10日より宮城県石巻市雄勝より硯伝統工芸士高橋頼男氏に会場にお出でいただき、雄勝の現状をお話いただき、雄勝硯など被災地からの物品の展示販売をしていただいた。来場者

からは義援金のご協力もいただき、意義ある催しとなった。



初日記者会見の光景

65回書道芸術院西日本展も盛大に

中央展に続き2月22日より26日まで、奈良県文化会館にて西日本展が開催され、約1000点の陳列は充実、25日には奈良日航ホテルにて出品者懇親会が約300名の参加を得、入賞者の顕彰式も含め盛大に行われた。

3月末には仙台メディアテークにて東日本展が開催予定。
(詳しくは次号にて報告予定)

毎日新聞創刊140年祝賀会 「感謝の集い」盛大に

東京日日新聞として明治5年(1872)2月21日創刊されてより140年、日本の新聞として最も伝統ある毎日新聞社の創刊記念「感謝の集い」が、創刊日の2月21日、東京自白の椿山荘で各界名士1200名余の来賓の集うなか、盛大に開催された。毎日書道展の座みの親であり、書道芸術院展、全国学生書道展も発足以来ご後援をいただいている。

創刊140年を寿ぐと共に、益々のご隆盛をお祈りしたい。会員諸氏におかれましては毎日新聞のご購読を是非お願いしたい。



創刊140年祝賀会 朝比奈社長のあいさつ

出光美術館企画展「古筆手鑑」

国宝「見努世友」「藻塩草」を中心特別展が開催される。ぜひご高覧を
* 会期 2月25日～3月25日
* 会場 出光美術館(丸の内帝劇上)

院事務所体制4月より刷新

創立65周年を迎えた書道芸術院は本年3会場での本展開催に続き、全国13会場での役員巡回展、更に公益財団法人への移行、全国学生書道展も来年2月開催の66回展に併設して開催することとなっているなど様々な重要事業を遂行しつつある。また昨年の東日本大震災による財政基盤への影響などを考え、平成24年度より院事務所の体制を大きく刷新することとした。役員はじめ会員諸氏の倍旧のご理解、ご支援をお願いしたい。

書道芸術編集担当の半田藤扇さんから前田龍雲さんに交代します。また事務員の石塚敬子さんと野木輝美さんは3月末日で退職されます。永年院の運営にお勤めいただき深く感謝申し上げます。

- * 事務局長 千葉蒼玄
- * 経理部長 白石和楓
- * 同 補佐 東福青堂
- * 事務局次長・書芸編集 前田龍雲
- * 同・書の教室編集 三浦鄭街
- * 事務員 羽田典子

刻字 (六)

小山 鳳来

或る日思い立って筆を持ち40余年これまで何をし何が残ったか、振り返って見れば慚愧の至りです。技倆は道半ばに程遠く歩き出して数歩のところ、しかし書によって得た教訓は大きい。得難い師を得て、その背中を追いつながら接した時間は短かったが師から得たものは計り知れない。私にとって書とは己を鍛え成長させる大切な手段だ

と思っている。一心に法帖と向き合い競書で展覧会で競い合うことも勿論大切だが、唯それだけで終ってはと思う。私は後悔はしない様に努めている。うまい作品よりいい作品である事を願っている。その時その時の作品は良くも悪くもその時点での自分の分身だと思っている。

常に何かを追い求め好奇心を失わずに続けたい。芸術する心を忘れずに歩き続けて行きたい。未知の表現は無限であり無限だからこそそれを求めて闘う。

責めを果すままに書き進めて参りましたが果して院の意向に副い得たか否か甚だ疑問です。身の程知らずに思いのままを書き連ねましたがこれが現実の私であればご寛容ください。

私は未熟だがまだまだ若い。

21世紀の書

— 私の主張 —

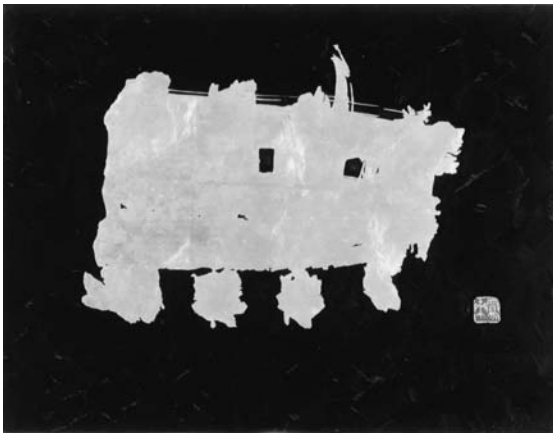
漢字 (六)

加瀬 澄春

この稿も最後となりました。昨今毛筆の出番が少なくなっております。メディアの普及で毛筆離れが加速し、手書きのものはあまり見かけなくなりました。書道そのものも、絵を入れたり色を使ったり、様々な工夫を凝らした一般受けのよいジャンルも出て来ました。誰が見ても楽しいもの、皆なが読めるもの、敷居が低く入りやすい分野がこの先流行するかも知れません。それはそれ、私は無器用でもいい、従来の蘭亭叙や書譜、

唐詩や漢詩の作品を年月をかけ努力研鑽して永々と先輩達の培って来た本来の書道を行きたいと思えます。我が師も晩年、書道の衰退に心を痛め憂いておられました。先人の残した素晴らしい書の魅力を後世に受けついで行くのも私達の務めでしょうか。ここ一、二年テレビ等の影響もあってか、少しづつ私の塾も生徒が増えております。これを一時的な流行とせず恒久的に継続できる様、その為に今自分に何が出来るか、私も老境に向かう中で少しでも考えねばと思えます。

38年書道が続けておりますが、今もって自分の代表作はありません。写真は61回芸術院展のものです。



平成16年 一門展出品 小山鳳来刻



第61回書道芸術院展出品

加瀬澄春書

「天職」としての書

篠田 祐子

(かな部・審査会員)

「天職」とは、天から授かった職業。自分のたましいのための仕事です。これは、「適職」とは違います。適職とは、自分の頭脳や肉体を使って、お金を稼げる仕事のことです。たましいの仕事というより、現世で生きていくための手段です。」

スピリチュアルカウンセラー江原啓之さんの言葉である。

私にとっての天職は正に「書」。この原稿を書くにあたり改めて自分の書道人生を振り返ってみて、書との出会いは天が導いてくれた、そう思えるのである。

大東文化大学に入学し授業で初めてかなを習い、日本独自の繊細で優美な文字に魅せられ、本格的に勉強してみたいと思っていた所に、それならばいい人がいると叔父が紹介してくれたのが永井幸子先生である。当時叔父は千代田区の職員で、千代田区内の坂や橋の名の標識の揮毫を区在住の永井先生にお願する仕事をしていた。この奇

跡がなければ私の書道人生は始まらなかった訳である。

大学二年が終わった春、母と共に先生のお稽古場を訪れた。数人のお弟子さんのお稽古を見学しながら終わるまで待ち、最後に呼ばれ、母と三人で話が始まった。話をしながら徐ろに先生が紙を折り始めた。「これにいろはを書いてごらん。」と紙と筆を渡された。今ここで!?緊張しながらも何とか最後まで書き見ていただいた。「基礎は出来てるね。」と言われたように記憶している。

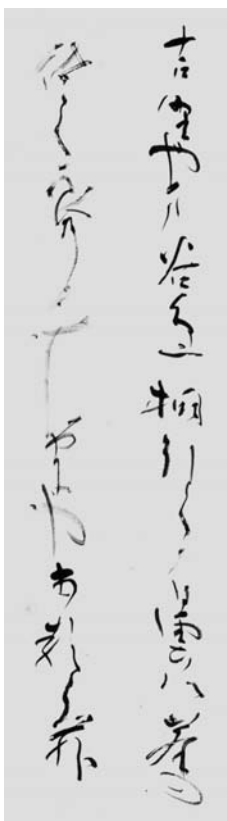
永井先生は余り多くを語らない方だった。ある時半懐紙に和歌を創作して持って行ったら、どこも直さず「いいよ。」と返された事もあった。本当にいいのか!?と思ったが何も聞かず、直された所はどこが悪かったのか、直されなかった所はどこが良かったのか、自分で考え消化しなければならぬのが初心者には難しかった。

しかし師事してわずか4年足らずで先生は亡くなってしまった。始めたばかりで師を失い途方に暮れていたが、石井明子先生と高橋松延先生が永井ビルでお稽古を継承してくださった。勤務先が近く仕事帰りに寄れるということもあり、平日夜遅くまでお稽古をしてくださった高橋先生にお世話になった。やがて永井ビルでのお稽古も継承困難になり、それならばと先生のご自宅まで通わせていただくようになった。高橋先生は永井先生とは正反対で、筆や手首の使い方、動かし方、一つの字の中に同じ線があってはいけない等等の指導は実技と言葉の両方を使い分

かり易く、細微な部分にまで及んだ。怠け者の私を辛抱強く指導していただく事18年余、その間に芸術院展では準大賞を受賞し、審査会員にまでさせていただいた。ここまで来れたのは先生のお陰と心から感謝している。

その先生も一昨年前に亡くなり、自分で書けるようになったとはいえ未だ未熟者の自分。どなたかに指導を仰がなければ、という所に今度は田村澄子先生がお声を掛けてくださった。先生からは、自分の字を作るように、景色を大切に等言われ、また沢山褒めていただいて自信をもらっている。

三人の師と出会い、それぞれの個性的な作品と指導に触れる事が出来、何かあってもその時々誰かに助けていただいている。これから先も困難な事はあるだろうが、私の書の道は守られている、導かれていると信じ、この天職は自分が唯一、人に誇れるものとして、生涯続けていきたいと思っている。ただ、生活の為にはどうしても適職の方がメインとなってしまっているのが現状である。だが江原氏曰く、「天職と適職という車の両輪のバランスを上手にとれば、人生というドライブは快適になるのです。」という。適職の方もこの春動続20年を迎えた。両方に恵まれた事に感謝し、先生方の作品に感銘を受けてきたように、いつか自分も人の心を動かせるような作品が書けたら幸せである。



第60回記念書道芸術院展 準大賞受賞作

篠田祐子書

第43回 現代女流書 100 人展

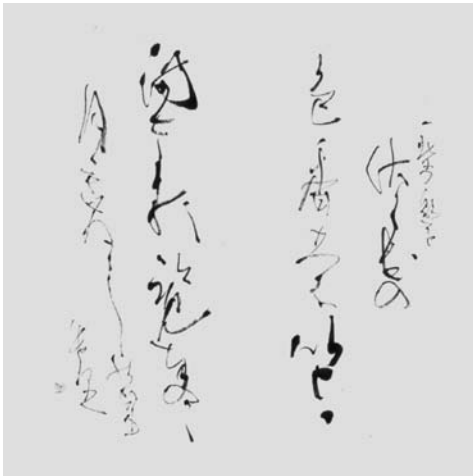
同時開催＝現代女流書新進作家展（第63回毎日書道展会員賞受賞作家）

会期＝平成24年 1月31日(火)～2月6日(月)

会場＝日本橋高島屋 8階ホール

主催＝毎日新聞社 後援＝(財)毎日書道会

〈一葉の歌を 咲く花の〉
下谷 洋子



90.5×91cm

〈立〉
香川 倫子



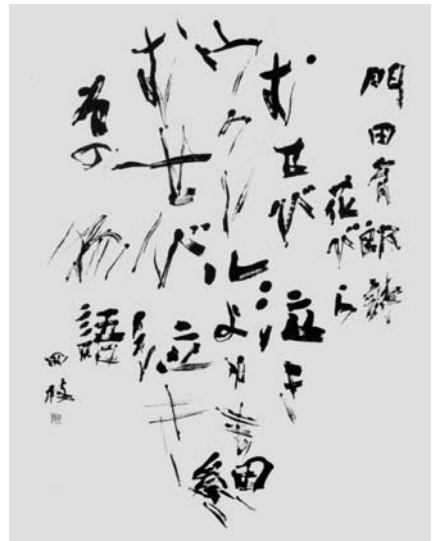
90×90cm

〈育〉
小伏 小扇



120×120.5cm

〈花びら〉
長井 四枝



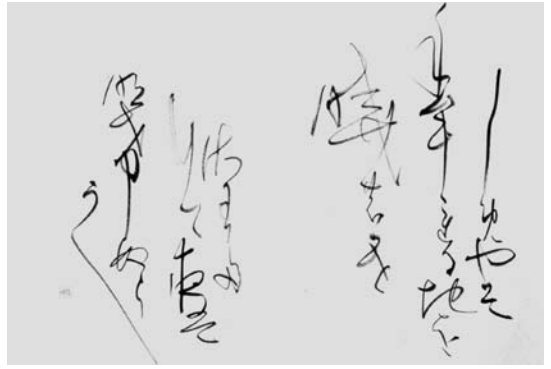
133×103cm

〈萌す〉



北村白琉

180×88.5cm



石井明子

〈平福百穂のうた〉

79.5×118.5cm

〈思念の流れ〉



小池蹊舟

172×70.5cm

〈興〉



萩原香扇

136×106cm

〈己〉



大井美津江

168.5×85cm

〈鞍馬の雪〉



白石和楓

170.5×75.5cm

〈春日憶李白〉



高田春来

165.5×52cm

〈スターバースト〉



工藤永翠

183×90.5cm

山田梓江



〈明日のために今日を生きる〉 87.5×16cm×6

新進作家展

石田和子



〈悠久の譜〉

73.5×150.5cm

〈連翹よ〉



齊藤理舟

175×84cm

〈玄による〉



倉林紅瑤

175.5×60cm

新進作家展

〈七言對聯〉



佐藤菜扇

176×24cm×2

〈しんしんと……〉



平川峰子

182×60cm

水野春翠



〈無〉

90×120cm

〈聞雁〉



加瀬澄春

178.5×57cm

漢字研究部

十七帖（東晋・王羲之）③

特別研究部臨書課題

（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

〈解説〉

十七帖には、隸意による、いわゆる章草体の感じは微塵もない。したがって言い換えれば、日本のかなの源流ともいえる。ただし、法帖によって用筆や表現力に相違が

あるので、そこを踏まえて臨むとよい。

本誌掲載の上野本他に、三井本、江川本、上田本等を含め、十数種類伝わっている。（編集部）

知有漢時講堂在。是漢何帝時立此。知畫三皇五帝以來。備有畫又精妙。甚可觀也。彼有能畫

用紙 半紙普通判
左の法帖の中から

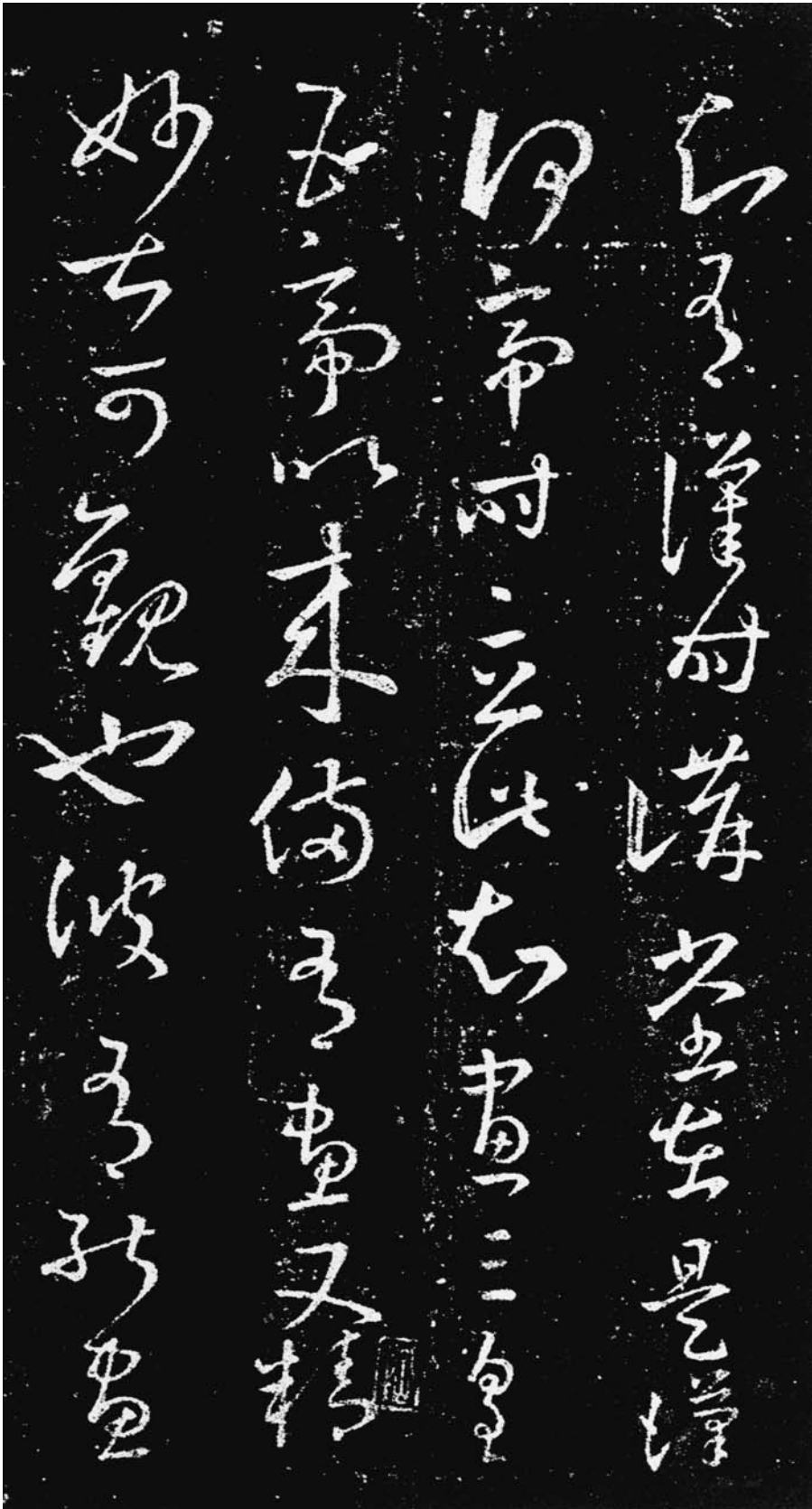
何文字臨書してもよい。
（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

（押印のみ可）



特別研究部臨書課題

Ⅱ（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

〈よみ〉

たにかぜはとをふきあけているものを
なにとあらしのまどたくらん
つがはねどうつれるかげをともしして
をしすみけりな山かはのみづ

おとはせでいはにたばしるあられ
こそよもぎのまどのともになりけれ
くまのすむこけのいはやまおそろ
しみむべなりけりな人もかよはぬ

※落款を必ず入れる。署名
もしくは〇〇臨
(押印のみも可)

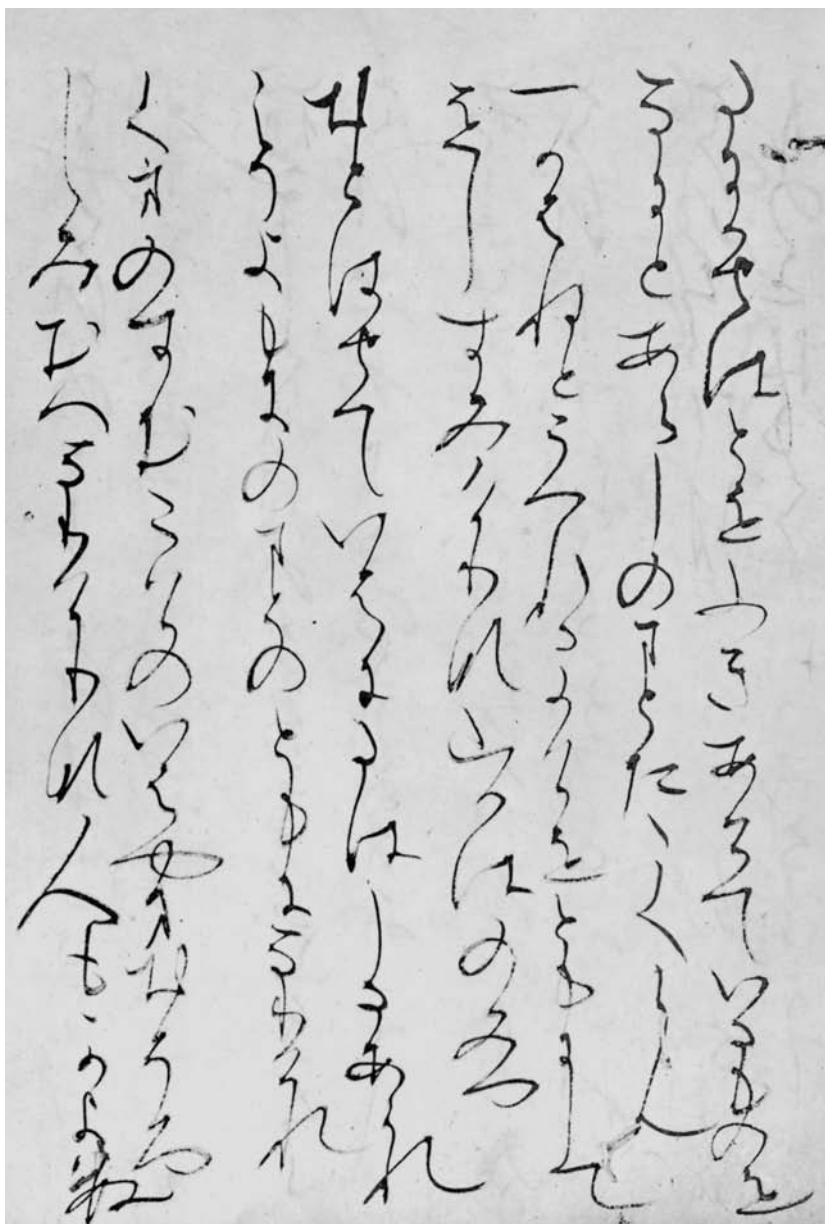
Ⅱ注Ⅱかな研究部競書作品は、
上の古筆の掲載部分より歌一
首以上を書く。(全臨も可)
用紙

・半紙普通判(料紙可)

〈たて長に使用〉

※別紙を裁断して貼付も可。

・半懐紙は、半紙サイズに切っ
て使用のこと。



(原寸大)

〈解説〉

山家心中集の書式は行書きで、大部
分歌一首を二行で書いている。線は細
くスピードののって直線的に運び、そ
のため明るく澄んだ表情をしている。

書写年代は、藤原俊成筆の内題から
推測して俊成存命中、元久元年(12
04)以前に限定でき、しかも、西行
の没した建久元年(1190)に俊成
が執筆した『花月百首撰歌稿』と同筆
の筆跡も見えるので、本書の書写年代
の範囲を、西行の没した前後に絞るこ
とができるとされる。

西行筆と伝わり、この第一種の書風
に類似している古筆に中務集がある。
(編集部)

漢字規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書



雲開萬壑春 よみ（雲は開く万壑の春） 廖道南

書体＝自由

習い方解説 (六)

辻元大雲

雲開萬壑春（廖道南）
（雲は開く万壑の春）

今回も五文字、最後となりました。春を迎えるの語句です。高いところから萬壑の春はあけてくるの意で、「萬壑」はすべての谷間のことです。「萬」は「万」の旧字体ですが、書表現の場合旧字体がよく使われます。もちろん「万」を使っても構いません。多くの古典で使用されております。

硬めの中鋒狼毫筆を使用し、切れ味の鋭い線を基調に、やや繁画による筆脈の流れでリズムを出してみました。思い切った大小の変化を取り入れ、紙面に動きを与えてみるのも面白いかもしれません。

書体は自由です。色々な書体に取り組んでみましょう。字典でよく調べ、出来れば古典を再修しつつ、応用創作表現に取り組んでください。

漢字規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

飯田春香選書

年豊人樂
春香
年曲豊

年豊人樂

よみ (年豊かに人樂しむ) 朱熹

書体Ⅱ楷書

習い方解説 (六)

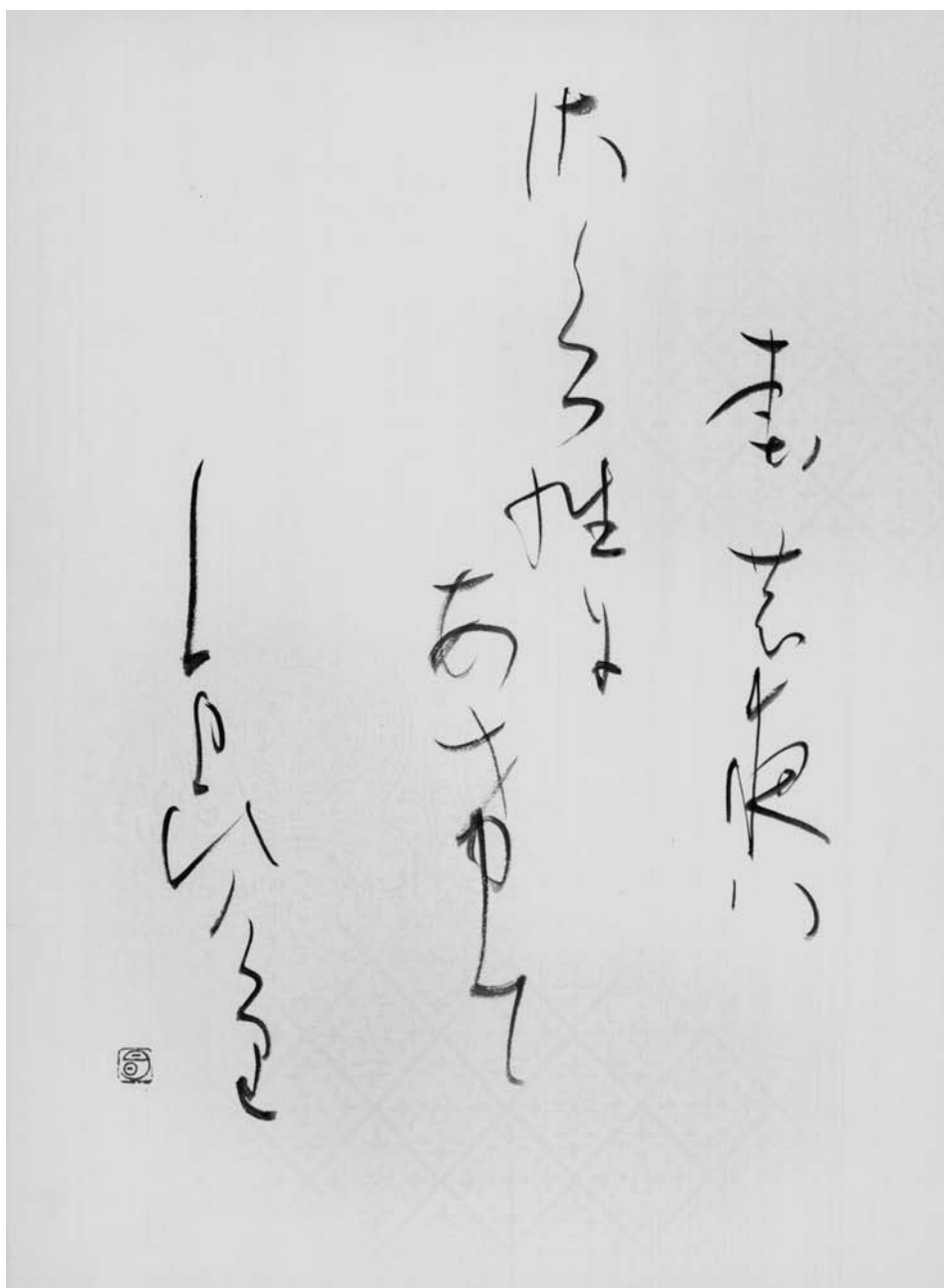
飯田春香

年豊人樂(朱熹)
(年豊かに人樂しむ)

今回で最終回となりました。
九成宮體泉銘風に書いてみました
が、改めて臨書の大切さを痛感し
ました。
「年」最後のタテ画をゆるまない
よう慎重に息長く書きましょう。
「豊」タテに長く造形し、最後の
ヨコ画で安定させましょう。
「人」左のはらいが短かめで、左
のはらいを堂々と。
「樂」全体にひし形になるように
し、木のヨコ画は息長く筆をつり
上げるように。

かな規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可)

石井明子選書



よみ方 春の(農)夜は(八)さ(佐)く(久)ら(羅)に(尔)あけ(希)てしま(万)ひけ(介)り(里)

創作

習い方解説 (六)

石井明子

春の夜は桜に明けてしまひけり
(松尾芭蕉)

いろは歌の一部を墨書した、ひらがなでは最古の確認例という平安後期の土器片が、三重県明和町の斎宮跡で出土したそうです。それは1月21日の朝日新聞の天声人語で扱われ、その書き出しと結びは、「ひらがなはやさしい」となっていました。改めて、人々がどんな日常の中で文字を書き続け、いろは歌が伝えられたかに思いを馳せました。併せて、句の作者にも畏敬の念が湧くというものです。

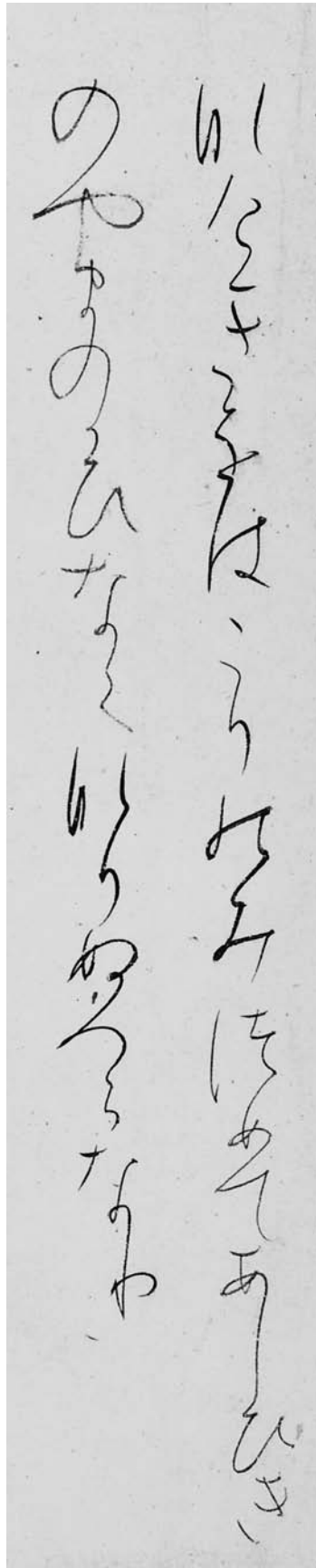
ところで書をする人は使い古した筆をどうしているのでしょうか？捨てられない私は、今回、古く疲れたものを使いました。余計な線が出たり、墨量の制御ができなかったり、思いと少しずれていくことも楽しみながら書きました。

過不足は魅力に化ける？

かな規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 な(那)げ(介)きをば(こ)りの(能)みつ(徒)めてあし(ひ)き

の(や)まのか(可)ひなく(久)な(那)りぬ(べ)らなり(利)

習い方解説 (三)

大 辻 多希子

鶯の身をさかさまに初音かな

(其角)

半切に俳句一句は単調になりやすい。横に張る線と、縦に伸びる線を配置して左右への広がり、行の流れに注意します。

漢字を多く使い、逆筆や転折をしっかりと書く事で単調にならないようにします。

かなとの調和をはかるため、書き出しの漢字の墨量が多くなりすぎないように心掛けましょう。

*たて形式に限る



よみ方 鶯の身を(越)さか(可)さ(佐)ま(万)に(二)初音か(可)な

創作

漢字条幅規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

竹田尚堂 選書

去年花裏逢君別 今日花開又一年
(去年花裏君に逢いて別れ、今日花開いて又一年)

(韋應物) 書体||自由

習い方解説 (六)

竹田尚堂

韋應物の七言律詩の首聯。花の下で別れた友人を懐しみ、来訪を「月がいくたび円くなるまで待つことか」(尾聯)と心待ちです。逸る心情を表現できないものかと、筆の弾力を利かせ、少し速度感あるように書き進めました。響きの高い書線は「白」を際立たせ、奥行きをも感じさせます。そんな線質に憧れます。

漢字条幅規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

小浜大明 選書

潮聲萬壑松風過 雲氣滿樓山雨來
(潮声万壑松風過ぎ、雲気楼に満ちて山雨来たる)

(薩都刺) 書体||自由

習い方解説 (六)

小浜大明

詩の意味は、「松風は潮聲を爲し、雲気は樓に満ちている。やがて雨が降ってきた」です。今回は王羲之の喪乱帖を参考に前回より動きを大きく表現してみました。喪乱帖は王羲之晩年の代表作とされ、骨力が秀れ、風韻が高い作品です。参考にして下さい。

習い方解説 (六)

最終になりました。今回は本人の親への小学校入学祝い状を課題にします。

一般的には、寒暖の差も激しい時期となりますので、浅春、春暖、霞立つ頃等、その時の状況で、前文を考えるとよいでしょう。

漢字を行書に、かなを連綿せず仕上げて見ました。

ペンは、筆と違い、線の太細が出にくく、線は単調になりますので、字列や、上下のバランス、余白のとり方を考え、書きこんで下さい。

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること)

拝啓　ご長男には、このたび小学校
にご入学の由、心よりお祝い申し上げ
ます。待望の、ご入学、ご両親様も
どんなにかお喜びでございましょう。
入学式の晴天を念じつつ、まずは
お祝へ申し上げます。

かしこ
雪枝書

ホープ作品
各部総評

NO. 609

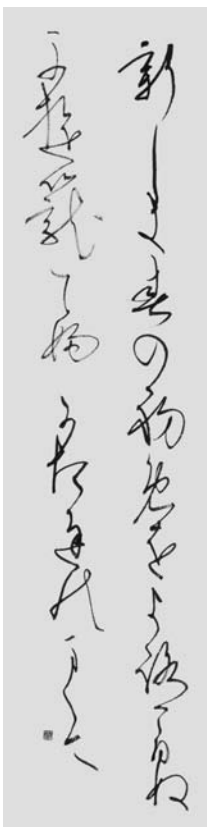
漢字部 師範 鷺山 美梢

暢びやかな筆致で、潤渾のバランスもよくまとまり、柔らかな線質が情感をよく醸し出している。
◎漢字部総評 参考例に頼りすぎの作多し。書体書風の多面的な研究を更に追求してほしい。古典に準拠した基礎力の養成も。(大雲評)



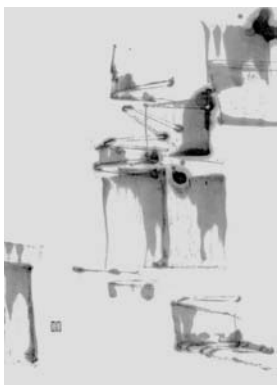
かな条幅部 五段 濱田 竹雪

しなやかなリズムを貫通させ、気負いのない自然さが爽快感を生みました。墨彩も澄明で美しい。
◎かな条幅部総評 新・籠、変体がなの免などに誤字が散見、参考手本で解りにくい所は必ず辞典で確認する習慣を。(洋子評)



前衛書部 特選 波多 祥舟

面線と細線による構成、宿墨の効果を生かした遠近感など余白が明るい魅力ある作。
◎前衛書部総評 個性豊かな作品が多く見られるが、作品と印の大きさに注意されたい。(蓮紅評)



漢字条幅部 師範 高橋 幸苑

紙質を生かした切れ味のある線。参考手本と異なる工夫も、師範としてふさわしい。

現代詩文書部 特選 佐藤 祥扇

斬新な横二段の構成、潤渾の絶妙なバランス、澄んだ白の空間が立体感を感じさせる作品です。
◎現代詩文書部総評 個性豊かな作が多く息遣いを感じます。さらなる研鑽を望みます。(無極評)

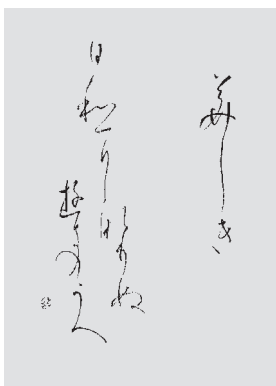


◎漢字条幅部総評 秀級以下の課題は多字数となって苦戦の跡あり。上級は書体や線質に工夫が見られた。(翠風評)



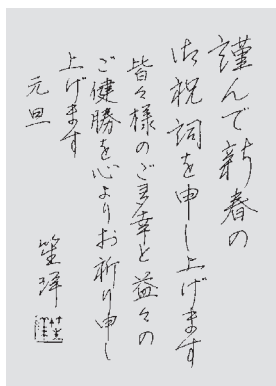
かな部 師範 近見 依未

穏やかな表現は過不足なく美しい。あまりの自然な運筆に、何か嬉しい心境の変化を想像します。
◎かな部総評 誤字少なく、快い作品多く好ましい。墨の扱いに凝しい作あり、色、量共控えめが上品です。墨汁は厳禁。(明子評)



ペン字部 師範 小山 笹洋

伸々とした運筆でとまどいが無い。かなと漢字の調和もとれていて最後まで一貫した流れの秀作。
◎ペン字部総評 草書の混じった作品には不自然なくづし方も見上げられる。一度字典で確かめてみることも必要である。(蒼玄評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

現代詩文書

(翠柳)

「嚴冬の」

加藤紫翠



加藤紫翠書

182×45cm

◆鋭い線、心の思いを墨にのせ凝結された表現が素晴らしい。体でリズムをとるその動きが全体に響く。(倫子評)

◆一点一画に書き手の心情が響き、深々と見る者を射る。嚴肅さを柔らげた落款の穏やかさが心憎い。(洋子評)

◆中央部に一行、濃墨のねばりを生かし、落款の細字がしっとりと寄り添う。無理なく自然な流れが美しい。(大雲評)

◆一行の構成でシンプルにまとめた。重さのある線がまわりの空間を押さえて重厚さと輝きを見せている。(蒼玄評)

漢字

(もくせい)

西川藤象

「楚中秋思」

57×172cm

◆横形式の行草表現で安定した表現。鋭い細線がリズムを醸し、大小の変化もバランスよくまとまる。(大雲評)

◆淀みのない行草体で、一行毎の動きのバランスが見事。リズムの緩急ものを得て、確かな芯を見せる。(洋子評)

◆漢字の流れは縦であるがそれを横に構成するのは仲々むづかしいがよくまとめた。終筆は一考を。(蒼玄評)

◆口ずさみたくなるような力強いリズムを感じる。筆先の細い線を体を使って表わしている素晴らしさ。(倫子評)

西川藤象書



前衛書

(四谷)

木原尚子

「道草」

75×150cm

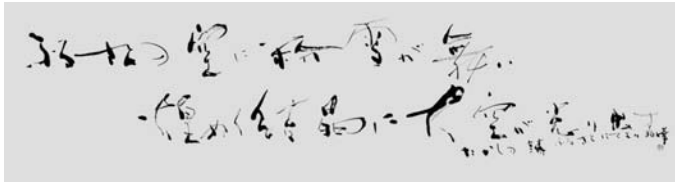
◆全身で紙背を貫き、ダイナミックに回転する。胸のすくような真っ正直な展開に新味を覚えた。(洋子評)

◆墨色が美しく立体感を感じさせる。右側の最終部、少々動きが小さくなっただ感がある。(蒼玄評)

◆体で書いた作品線に勢いが乗って、見ている者の心に動きを与えてくれる少々終りが重い感じ。(倫子評)

木原尚子書



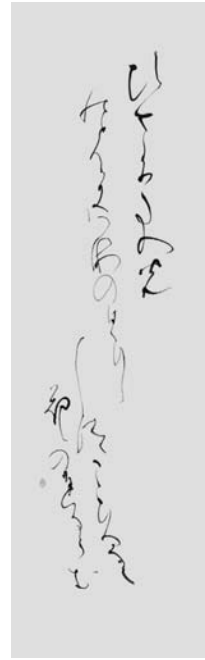


42×160cm

◆吸い込まれそうな叙情が横書きであることに敬意を払う。筆者の想いが、自然な陰影を醸し出した。
 (洋子評)

◆淡々とした中に呼吸のリズムが感じられる。中央部に中心となる型があるともっと響くのでは。
 (蒼玄評)

かな (前橋)



178×53cm

「ひさかたの」 碓井 弘

碓井 弘書

◆側筆にせず直筆で先を使って切ってゆく構成は新しさを感ずる。後半部少々曲線の回転が弱く見える。
 (蒼玄評)

◆歌の流れをすんなりした線で表現されている。心穏やかな心境を与えてくれ忙しい一時を癒してくれる。
 (倫子評)

◆明るく爽やかな三行構成作。やや余白に負けそうな感もあるが、潤渾のバランスよく自然さを買う。
 (大雲評)

◆軽やかに歌うように流し、細線の弱さを感じさせない行構成も巧み。香紙切を彷彿とし、展開を彩る。
 (洋子評)

現代詩文書

(蒼原)

金濱 珀燐

「たかしの詩」

◆一つ一つの字を大切に表現しているようで流れをそこに感じる。横書の構成でバランスよく表現。
 (倫子評)

臨書

(大雲)

阿部 恵泉

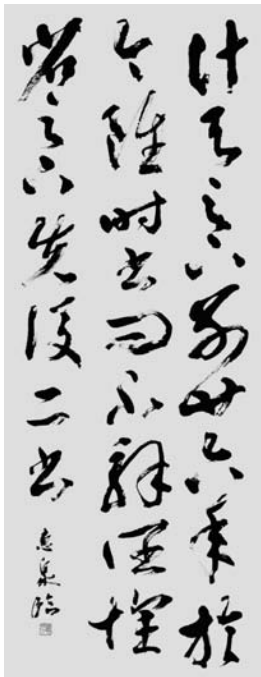
「十七帖」

◆上野本の味を生かし、ゆったりとした暢びやかさも感じさせる。的確な臨書力に裏打ちされた作。
 (大雲評)

◆十七帖はとらえ方によって種々の表現が出来る。一つの解釈として流れを重視した作品か。
 (蒼玄評)

◆自然な筆意でしなやかな動きは、幾度となく臨書されてる賜物でしょうか。収め方のバランスも美しい。
 (洋子評)

◆ゆったりとした雰囲気表現は墨色なのか、だが鋭い筆の動きを感じさせてくれ現代の十七帖らしい。
 (倫子評)



135×53cm

阿部 恵泉 臨

創作の部(62点)	漢字	12点
かな	19点	
現代	25点	
篆刻	2点	
前衛	14点	
臨書の部(35点)	漢字	33点
かな	2点	
総出品点数	97点	

〈特選候補者〉	墨宣	小林 翠芳
〔創作の部〕	八街	三浦 鄭街
〔漢字〕	安波	鈴木 英晴
	蒼原	熊谷 青山
	大雲	江本 興舟
〔かな〕	志引	鈴木 朝夫
	声香	米倉 馨香
	玉松	橋本 紅霞
〔現代〕	蓮紅	千葉 華紅
	うる	今関 心華
	大雲	松永 香秋
〔前衛〕	青蓮	大町 菜円
	秀水	坂井 初江
	蓮紅	浅野 彩紅
〔篆刻〕	大雲	佐藤 希雲
〔臨書の部〕	〔漢字〕	
	千葉	小林 咲舟
	千葉	渡辺 秋湖
〔かな〕	光昭	嶋 由香

漢字研究部
(十七帖)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



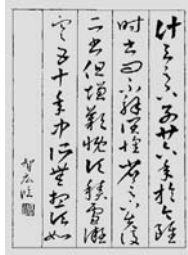
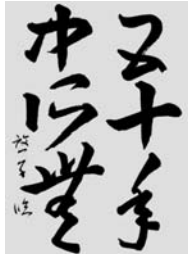
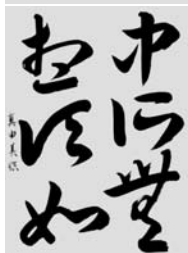
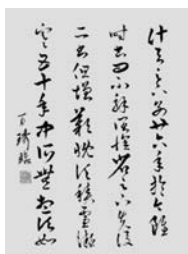
田村 喜代子

漢字研究部 特選 田村喜代子
運腕大きく筆脈も一貫し、リズム感もあり
ます。特に柔軟な中に、芯の強さを秘めた線
質に魅力を感じます。行間も明るく響きがあ
ります。全体に気負いなく書かれた自然体の
見事な臨書です。

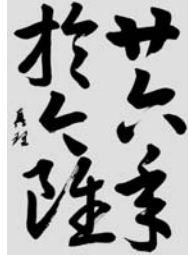
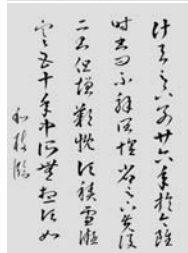
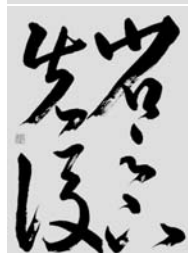
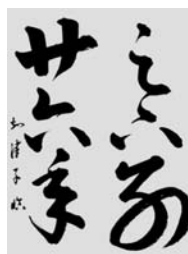
◎漢字研究部総評

古典鑑賞の解説にあるように、この十七帖

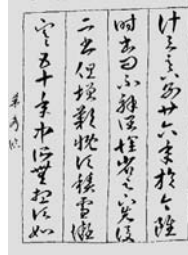
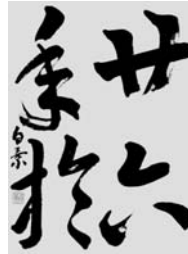
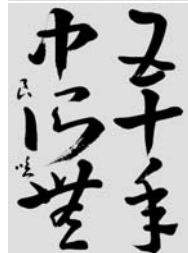
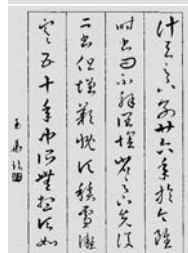
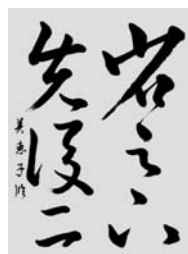
は消息です。従って、一字一字が独立して書
かれてはいますが、文字と文字のつながりが
大切です。筆脈を切らずに書く為には、最終
画から次の文字の始筆までは一気に書き、次
の文字の転折で墨つぎをすると良いのではと
考えます。この手法が「三井本」の転折には
みられます。その他、結体上からみると、草
書だからと、必要以上に筆を大きく回転させ
ている作品も少なくありませんでした。



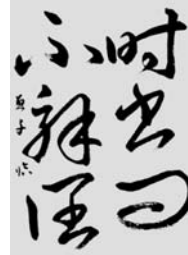
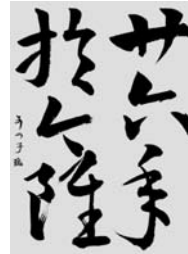
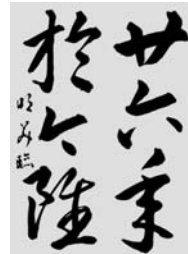
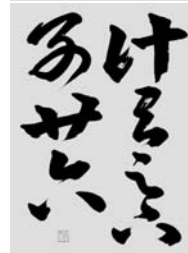
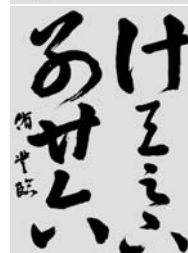
智啓 裕美 真由 万美
広子 子子 子子 子子



真谷 紀美 和枝 紅雨 知津
理秀 子子 子子 子子



華白 紫景 良子 美恵
秀景 邦子 子子 子子



恵あ 明流 麗流 澄子
子子 美流 子子 子子

